

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

|                   |                                       |
|-------------------|---------------------------------------|
| 論題(和文)            | 知財見聞録 南北に分断された島 キプロス                  |
| Title(English)    |                                       |
| 著者(和文)            | 田中義敏                                  |
| Authors(English)  | Yoshitoshi Tanaka                     |
| 出典(和文)            | 発明, Vol. 113, No. 7, pp. 36-37        |
| Citation(English) | INVENTION, Vol. 113, No. 7, pp. 36-37 |
| 発行日 / Pub. date   | 2016, 7                               |



# 知財見聞録

## 南北に分断された島 キプロス

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

### ようやく筆を執ることに

中東の紛争地域に近いせいもあり、キプロス共和国を訪れたことのある日本人は少ないのではないだろうか。

2011年にIAITL国際会議が開催され、訪問する機会を得た。当時、バン・キムン国連事務総長が、2010年と2011年にキプロス南北両首脳と三者会談を5回にわたって行い、キプロスの南北対立問題の解決に奔走していた時期であり、もう少しで打開策が出るのではないかとの憶測から、なかなか本稿の執筆に手をつけられなかった。

その後、幾度となく国連の仲介があったにもかかわらず、いまだに打開の道筋は描けない状況のようだ。昨年4月に国連仲介の下、直接交渉が再開されたとの情報も聞くが、「これ以上は待てない」と、筆を執る決意を固めた。

### 南北に分断された島

キプロス島は、東地中海最大の島であることから、海上交易および十字軍当時の重要な軍事拠点として、歴史的にさまざまな勢力の影響を受けた。

紀元前のエジプトから始まり、ギリシャ、ペルシャ帝国、ローマ帝国、ビザンチン帝国、十字軍に参加した各国からの支配、さらには、その後のオスマン帝国の支配を受け、第一次世界大戦後はイギリス領となり、1960年になってようやくキプロス共和国として独立を果たした。

しかし、今度はキプロス島内での民族衝突により、ギリシャ系住民とトルコ系住民の間で武力衝突が発生する。1974年にはギリシャの軍事政権がキプロス島に侵入し、これに反発したトルコ共和国と衝突した結果、島は南北に分断されてしまった。

2004年には島の南側であるキプロス共和国がEUへの加盟を果たすが、北キプロスはトルコが承認しているだけであり、世界は北側を国として認めていない状態がいまだに続いている。

### 北キプロスの日帰り視察

キプロス共和国の人口は約86万人だが、北キプロスの人口は正式なものではなく（全体の4分の1程度といわれている）、総人口は不明である。

日本政府としては、北キプロス地域を外交上認めておらず、「トルコ軍実効支配地域」と位置づけている。

分断国家というと、すぐに朝鮮半島を思い浮かべてしまうが、キプロス共和国の首都であるニコシアの市内が南北に分断されているので、この点で考えると、朝鮮半島とは若干様子が異なるかもしれない。

キプロス島では、南と北の境界線に国連軍による監視地帯が設けられており、南北の行き来も検問所によって厳重に監視されている。我々学会参加者は、いわば「観光客」のような扱いであった。

ニコシア市内の検問所から北側に入ることではできたが、宿泊は認められず、検問所が閉まる夕刻には南側に戻っていなければならない。

検問で手続きをして北側に入った所は両側に店舗が軒を連ねる小道で比較的明るい雰囲気であるが、そこを抜けると古い年代物の建物がひっそりと立ち並び、何となく暗い感じがした。

観光客も少なく、経済状況も不振が続き、人々の暮らしも裕福とはいえない地域なのかもしれない。

ニコシア市内で乗ったタクシーの運転手は、家族を北側に残したトルコ系住民とのことで、なかなか家族に会えないと嘆いていた。その後のニュースによると、検問所の数も増え、現在は比較的自由に往来できるようになっているとのことだが、詳細な状況は再度訪問してみないと分からない。



北キプロス側の建物

## サービス産業の国

南側のキプロス共和国は、観光業を中心とするサービス産業が労働人口の60%超を占めているといわれる。

地中海の温暖な気候に恵まれ、ギリシャなど、欧州から多くの観光客が訪れているようだ。天然資源は乏しく、食料自給率も低い(24.6%)。自動車をはじめとする工業製品の多くは、海外からの輸入に頼っているのが現状とあってよさそうだ。

経済を支えているのは、法人税を低く抑えたタックスヘブンとしての海外からの投資のようだ。観光・金融立国ともいえるのではないだろうか。

キプロス共和国は、欧州特許条約(EPC)の加盟国であり、同条約の下で特許保護がなされている。また、同国商標法によって商標およびサービスマークが保護されている。

観光業を含むサービス産業が主体であるが故、知的財産の主役は商標のようだ。特許保護の対象である技術開発は、あまり目立った存在とはいえない。

## ビーナス誕生の地

キプロスの場合、その産業構造から海外線に沿って工業地帯があるわけではないため、海の透明度は非常に高い。ニコシアからバスに乗って約90分の海岸線のレストランで研究者交流会が開催されたが、そこから海を見下ろすと、海底までクッキリと見えたのには驚いた。

キプロスは、愛と美の女神アフロディーテ(ビーナス)誕生の地として知られている。ギリシャ神話によると、女神アフロディーテは、この島の海岸近くで、海水の泡の中から生まれ出たというが、それもうなずける。

## ニコシア市内に大手法律事務所

学会の会期中、ニコシア市内の大手法律事務所Andreas Neocleous & Co. LLCを訪問した。120名超の弁護士を擁し、キプロス以外にも東地中海および南東欧州各国の業務を受託している。

特に、ベレストロイカ以降のロシアおよび東欧との関係が緊密であり、これらの国からの投資がキプロスの発展の大きな礎となっている。

2010年、同事務所は海外からの投資案件に多大なる貢献を果たしたとして、その功績がキプロス商工会議所からたたえられたという。

学会からの訪問者全員に『占領されたキプロスの教会への旅』という高価な書籍が手渡された。やはり、海外のクライアントを相手にしている事務所はビジネスに対する姿勢が違う。見習うべきところがあるかもしれない。



学会発表の様子



コンサートホールにて



Nissi Beachのレストランで学会参加者との交流会



学会の会長たちと記念撮影



南アフリカの大学教員と2ショット



法律事務所からいただいた書籍